



恋を殺す時計

思い出の曲

かなり無理をして
頷いていたけれど
きっと気付いていただろうね

今になって
好きになったんだよ
君が薦めてた曲

そしてわかったんだ
心が欠片探すとき
染み渡る曲だって

側にいたのに
こんな気持ちだったなんて
ひどく傷つくけれど

今度会うときは
口ずさんでいるよ
君との思い出を胸に

カーテン

清らかな吐息
僕は逃げる
カーテンに包まって
朝を迎えたよ

いったい何が
二人を紡ぐんだ
他人でいても
幸せだろうに

愛していると
言ったときから
とても怖くて
とても苦しいんだ

君は目覚めたのに
僕を探もしない
朝日を遮っているのは
僕の心なんだろうね

ボールペン

黄色い花を描かなければいけないんだ
君に伝えなければいけないんだ
どこまでも探し続けたんだ
でもボールペンしか手元にないんだ

だから文字にしてみたよ
感じたことを描いてみたよ
何日も何日も
ずっと花を書き続けたよ

でも うまくいかないんだ
どうしても 伝えられないんだ
ボールペンも なくなってしまいそうで
だから 仕方なかったんだ

「黄色いペンをください」手紙にして
最後のボールペンのインクが尽きた
ああ どうしよう
宛名を書くことができない

輪郭

廃屋に杭を打ち込め

心に刃突き刺せ

全部消さなければ

僕が消えてしまう

ああ それなのに

浮かび上がる 君の輪郭

爪跡さえ消したのに

笑顔の形焼きついている

疲れたから眠ってしまえ

もうどうだっていい

いつまでも好きなんだ

どれだけ傷つけられたとしても

バニラティー

出会いは地下の喫茶店
別れは一通のメール
覚えているのはバニラのおい
記憶にない紅茶の味

最近行かなくなった本屋
雨漏りが直っていたアーケード
君のことばかり気にしていて
全部見えていなかったんだ

世界が今突然叫びだして
僕の名前を突きつけてくる
風に折れそうな木は
六年も傾いたままだったなんて

出会った地下の喫茶店
一人だと 広すぎるテーブル
今日初めて僕は
バニラティーの味を知った

居場所

星が見えたら
ギターをしまうよ
苦いガムなら
もう慣れたもんさ
眠ってしまってもかまわない
ここが僕のいる場所

花の名前は
おぼえちゃないけど
星座だったら
結構いけるよ
だって世界は
そっち側に開けて

懐かしむ間も
風が吹く日も
ただ君を見て
こにいるんだ
さあ歌おうか
心の中でだけ

妄信

妄信

野菜のにおいとか
無駄な足掻きとか
かわいい君とか
瓦礫の街とか
全部
嘘だったんだね

手紙が来るたびに
僕は踊っていたけど
どこからか君は
笑っていたんだろう

それでもまだ
消したくはないんだ
いつまでだって
妄信してみせるよ

君だって知らないんだ
僕がどれほどに
おかしい人間か
お互い様だろう？

浴衣

僕らの故郷には 夏が少ないから
君の浴衣は 本当に罪だった

僕らの故郷には 星が多いから
君の浴衣は まばゆく照らされていた

夏が終わる頃 僕は思い切って
君にそっと 別れを告げたんだ

僕らの故郷には 時間がとどまるから
君の浴衣は まるで昨日の事

また夏が来て また会えた時
二人の涙は 沢を下って

また来た夏の 永遠の中で
再び二人は 別れの準備を

僕らの故郷には 残酷な静寂がある
君の浴衣は 優しい罪だった

摘み音

花の色は紫でしょう
あなたは曖昧を好むもの
私は赤を選びます
青が好きだと偽ってきました

いつ振り返るかを
試しているんです
私の周りから
花が消えていくんです

摘み音に気付いたとき
罪お咎めを差し上げましょう
私を独占しておきながら
未だに心触れさせないなんて

けれどもあなたは
優しい顔で振り向くから
私も微笑んでしまう
また 繰り返しに戻るのです

遠距離恋愛

大声を出してみたんだ
君に届くかもしれないと思って
けれど返答は
誰のだかわからない銃声

じいちゃんの耕した畑は
ただの荒地になって
今じゃフェンスが
走り抜けている

変わらぬ距離なのに
遠すぎる君
有刺鉄線越えたら
死体で会えるかな

誰かがほざくんだ
平和になってよかったって
だけど僕らの恋愛にとっちゃ
本当にどうだっていいことなんだよ

レイニーブルース

雨の日は凍えてしまえばいいさ
野良猫は自分で屋根を探すよ
そんなことを言っても、心は震えている
そんなことを言っても、君を探している

三拍子じゃ盛り上がらないよ
深く沈み込む隠喩がいい
フルキャストじゃせませぎるよ
淡い色のカクテルにおぼれる

雨の中飛ばされた傘
いつか会う君にあげよう
雨音は奏でていくよ
急ぎすぎた四拍子を

もう一度踊りだすんだ
それは未練じゃないから
もう一度歌いだすんだ
とりあえず、レイニーブルースを

ふたり

くるり くるり
まうよ あかい
きずな 心かく
きずが のこり
ふたり さいた
あのひ ぼくら
ことば なくて
いまは なにも
ないと おもう
だけど きっと
あいは あった
ひどい ことは
いまも きみを
すきだ だから
にげる どこへ
ふさぐ みみを
だから いまは
でんわ きるよ
なくて しまう
それは いやだ
くるり くるり
まって おちる
ふたり いまは
ただの ふたり
きみは なんで
かわら ないの

火の玉

君と 夏の日 遠回り
誰が 聞いたの そんなこと
いいさ どうでも これからは
散り散り ばらばら 離れ離れ

そうだ 僕は 火の玉に
なって 君を 追いかける
そうさ 僕は いつまでも
心は 君に くびったけ

笑って いると 泣きたくなる
だって もうすぐ 僕たちは
散り散り ばらばら 離れ離れ
火の玉 なんか なれないよ

墮落

墮落

そのテイストは幻滅だ
コードは絡まりあって
出所見失ってる
不束者によろしくだよ

このスパッツは最悪だ
白すぎて薄汚れてる
全部苦しくなって
マリンバ奏者に転職だ

君がいないこと考え出したら
自分のことでいっぱいになって
世界の回転が止まっちゃうぐらい
一点集中の悔しさなんだよ

こうなったら新しい言葉
いくつだって作ってやる
この頃ずいぶんちんけじゃないか
こんな墮落が許されているなんてよ

星のゆれる港

二人は二人の間に
見えない鎖ぶらさげて
幼くて でも 膨らんでいく
永遠への願い抱きしめていた

歩き回れる距離は
海岸線に阻まれて
秘密を背負ったままの
二人には短すぎた

あの大風が雲吹き飛ばし
星が波間に顔見せたなら
父か兄の船を借りて
穢れを洗う旅に出る

二人は二人の間の
つないで手離さぬまま
夢の中で明日を誓う
星のゆれる港の片隅

JORNEY

journey

それは罪の荷だ
どこまでも丸い
棘が抜けないんだ

いっそ河に溺れ
閻魔に出会おうか
これは軽口なんだ

会いたい 会いたいことが
冷たい 凍える心に
惨すぎる 醜すぎる姿に
翼を 翼を与えたあの日

a journey into the pit
時は枚数を重ね
取り戻しに来るんだ
綺麗過ぎる場所に
良心を置き去りにした
やっと自分を手に入れたんだ

二度と戻らない
楽園の足跡を
せいぜい笑うがいいよ

傷

今あなたの隣にいるのは誰かとか
そんなこと気にしているけれど
その居場所を捨てたのは私
そういう強さを見せたかった私

未だに捨てられないものが多くて
新しいものは全部通り過ぎて
全て循環していく
足りないものだらけのあなたへと

傷つければ もっと傷つければ
私にしか癒せない 深い傷にすれば
傷つけられれば もっと傷つけられれば
私にしかわからない そんな傷になれば

忌々しいのは私の心
強く縛られるのを望んでいるのに
どうでもいいって口からでまかせ
戻れないことを認め始めている

ノート

歌を歌うのに

必要なもの

声 愛 君 そしてノート

夢を語るのに

必要なもの

声 空 君 そしてノート

だんだん強く

想いが重く

ノートにどンドン

書き込まれていくから

僕を語るのに

必要なもの

声 時 君 それから、ノート

空腹

私の中で待ってる
その虫は
お腹を減らしている

私なんかを
選んだせいで
困ってるだろうね

私は愛を
信じないから
誰からも愛を
貰えないんだ
君は愛を
食べるらしいけど
たまに自己愛
来るだけでしょう

きっと今も
呆れ顔で
私を恨んでる

でもねいつしか
私も愛を
とっっても求めているんだよ

本当のこと

本当のこと

新幹線じゃ遅すぎるよ

君のうそつきな魅力は

もう彼方へ飛び去っていった

期待する 次は何

期待させる 才能だね

期待過剰 たまに失望

二人の明日は

どっち向いても笑顔だ

そんなことって

珍しいだろう

みんなに自慢したら

やっぱり笑われた

君のついた嘘は

ついに地球をめぐって

今背中に突き刺さったよ

これからどれだけ

一緒にいられるんだろう

永遠だって君は言うんだろう

どこまでが本当か

考えないのが幸せだって

たまに本当のことというと

ひどくさびしくなるもんだよ

君の魔法

君の魔法

教室の隅でこそこそ

弱虫の振りしてるけど

知っているんだよ君の力

誰だって呪い殺せるぐらいの

十年前一緒に追いかけた

蝶の姿覚えているかい

いつから僕らは違う種族に

分けられてしまったんだろう

きっと最後には残酷に

醜い姿で再会するから

今はそっとしておくけれど

胸は痛むばかりなんだ

教室から飛び出たとき

虹がかかっていたよ

あれは君のものなんだろう

僕だけは知っているんだよ

非常識

いわれのない中傷を受けて
僕は世界を呪い始めた
けれどきっとまだどこかで
美しいものを信じていたんだ

本当は抱きしめて欲しかった
君が現れてうれしかった
それなのに僕は罵り始めた
僕の愛は非常識だった

君は美しい
突然の告白は
雨の音にかき消されて
また僕は世界を呪った

本当は普通に憧れていた
取り返しがつかなくなって
初めてちゃんとわかったよ
非常識はかっこよくなんかない

そして、それで

宛先不明で帰ってくる
手紙を見つめているから
僕の素敵なプレゼントは
明日に持ち越しなんだね

君への特別抱いた奇跡
だけど君の心は満席
思惑はずれっぱなしなのに
二人は友情を分かち合うんだ

君の幸せと僕の葛藤
そして、それで何も起こらない
君の不幸と僕の嫉妬
そして、それで何か期待する

僕の気持ちは行き先不明
こんなに側に咲いていても
遠すぎる太陽に向いている
可憐な花には触れられもしない

ひよこ

ひよこだよ
ふたりまだ
おさなくて
あいなんて
かたれない
だけどまだ
てをつなぎ
しんじてる
いつまでも
つづくこと
なんでだろ
くるしいよ
しらぬふり
してるから
きみだって
きづいてる
そうだろう
わかってる
だけどいま
できること
わらうこと
それぐらい
だからいま
ふたりとも
だまってる
ひよこだよ

僕とその向こう

僕は見ていたから
いつも見ていたから

運動場の向こう 君の家
白いアパートの五階 その窓に

いつも映っていた
揺れる茶色い髪

みんなは待っていないけど
僕は待っている
逃げ出せる君が
うらやましいから
けれど君はこちらを見て
いつも疲れた顔で

若い僕らには 世界が狭すぎるけど
いつかきっと 抜け出せるから
等しい線は 常には引けないけれど
君の望むものは その先にあるかもしれない

僕は見ているけれど
明日は見ないかもしれない

私情の夜

コーヒーの缶が倒れて
私は悟った
あなたは二分後に
タバコを探す

切っ先はもう
丸くなってしまった
結論の出ない夜を
迎える気はないのに

揺れるカーテンの
ひだの数よりも
今の私には
私情が溢れている

ライターは全部
隠しておいたから
長い夜のゲーム
あなたも楽しんでみて

下僕

一体何処まで 鼓動を伝えるんだ
この決心は 揺らいじゃいけないのに
未だ愛の記憶が 中枢神経へと
影響力を失わない なんてことだ

最初で最後の 殺意なんだ
回顧で頑固な 軽いもんじゃない
刃渡りから滴り落ちるのは
紛れもない脂汗 怖い

そして僕を見つけ
君は笑うんだ
そして言うんだ
わかっていた、そして

両手広げ 全てを捨てた
肯定するよ 跪くから
下僕でいいんだ そんな風に
いつまでも僕らは続いていくんだろう

一体何処まで 鼓動を伝えるんだ
慢心だったんだ 君を殺せるなんて
今は愛の追憶が 恍惚へ至るよ
蛍光灯でぶん殴って きっと心地よいから

屍カウンセリング

屍カウンセリング

君は何にこだわっている

ここから始るのは

一方的な攻撃だろう

屍カウンセリング

君は答えること拒む

こんなに楽しげなのに

一人きりで閉じこもるのかい

ジャンプしてロック奏でる

玩具見て防具はだけの

細部捨てロングトラブル

腐敗後悔打開絶対

屍セルフカウンセリング

君はもう僕から自立した

壊れて初めて言える

一番君が好きだ

偽・裸・義・裸

この手は伸びるんだろう
優しき偽りのため
亡くしてしまったものを
覆い隠そうとして

二人は脱ぐんだろう
傷つけやすいからこそ
傷つけあえない姿
正しさを抱き寄せて

限らない想いを
注ぎ込むつもりなら
もっと段階が必要だった
弱者が混ざりだす

この手は迷うんだろう
そこが出発の目印
僅かばかりの迷い
今はそれすらない ギラギラ

スターライト

白い屋根の家

赤い僕の腕

青いはずの顔

そして スターライト 金色の

痒くなる心

痛くなる胸

病み果てた全て

そして スターライト 癒しの

瞬く川の中で

光に埋もれる恒星

君に僕の名を捧げよう

忌まわしの紋章を

凍えてく体

怯えてる本性

錆び切った真実

そして スターライト スターライト

パーツ

「君は期待はずれだ」
闇からの宣告は
心の器を侵食し続けた
ただならぬ気配は
一人きりの部屋では
自分を腐らせただけ

だから それだから
初めて「好き」を聞いたとき
全部やり直さなければ
無駄になると覚悟した
誰かに期待される事を
断念させられていたから

飛び立ちたい人たちは
必死で旅券を探してる
それはそれでいいから
今必要なのは
しっかりとした意思
歩き出すための、最初の一步

過去の自分が吐き出した
灰色の息が邪魔をしても
見えているもの一つだけあるから
諦める事に傾いたりしない
腐ってしまった部分を
何とかつなぎ合わせていこう

街路樹

マイナス8度の私の心に
そっと触れてくれたあの時に
二人の瞬間は始まったんだ
この街路樹の下で

二人で笑った コト
曖昧にしていた コト
失ってしまった コト
全部全部大切な コト

思い出の中で育った
小さな蕾からの芽生えは
二度目の冬を越えたら
しぼんでしまったんだ

街路樹の下で
街路樹の下で そう
ちょうどこの場所で
終わっていくんだね

秘密にしていた コト
忘れてしまった コト
ごまかしきれなかった コト
全部全部現実の コト

街路樹の下で
手袋を落とした
二人の瞬間を吐息に乗せて
最後のコトバ 代わりにヒトシズク

君と二人きり

君と二人きり
だけどさびしいよ
君は喋らない
君は瞬かない
君は息をしない
私が殺したから

君と二人きり
最高の孤独
星の见えない夜
私は眠る
目覚めのある夢を見る
君と二人きり
君と二人きり

純愛

喋っていると 喋っていると
近付いているのに それなのに
君が選ぶのは違う

間違っているよ ただ一点
僕であるべきなのに
そうあるべきなのに

傷つけたいよ刹那の間まで
呻かせたいよ輪廻の途上で
悔りたいよ真理の作用で
包まれたいよ汚れたままで

烙印だらけの心の襷には
優しさが極悪に瞬く
アア ノノシラレタイ

喋っていると 喋っていると
近付いているのに もう二度と
正しい言葉など信じ込まない

出兵前夜

雨音が静まったとき後悔しなかったのは
君への愛しさが指先まで通じていたから
隠れているばかりの逢引だったのは
僕がこんなにちっぽけだからだと思っていた

知っているように少しも
勇ましさも忠実さもないから
物語に紡がれるように
君を連れて逃げたかったけれど

戦闘機から君を思うよ
嫁いで行く君は
もう忘れてもかまわない
ただ自分のためだけに死ぬのだから

ああそれでも書かなければならないんだ
人並みのことを最後にしかしてあげられない
君を最初にそして最も強く抱きしめただろう
僕は君を愛しています

好き

優しく なくても
笑って くれなくても
キスが なくても
話して くれなくても

あなたが好き 好き 好き
どうしても好き 好き 好き

ひどいこと されても
いつまでも されてても
うらぎりを されても
あなどりを されてても

あなたが好き 好き 好き
いつまでも好き 好き 好き

こんな関係なのに
信じてしまうのは
変わらない想いと
限りない可能性

あなたが好き 好き 好き
好き 好き 好き
でも言葉に すると 崩れる
好き 好き 好き

ペンギン

受話器の向こうで
泣く君の声と
慰める誰かの声
交錯していたよ
一体これ以上
何を伝えたいんだ

大事に育てていても
君が帰ってこなければ
愛の卵は
凍えてしまうんだ

翼をはばたかすことなく
暗い海に飛び込んでしまう
闇雲に泳いでも
出口は見付からない
短い手足は空回り
孤独よりも孤独な孤独

急いで涙を乾かすんだ
君はもう太陽の下だから
深いところから
ただ見上げている

想い

明るいうちに
帰っておいで
君の光特別なこと
誰にも悟られないうちに

今度の夢は
黙っておいて
君の炎香りの中で
居場所を知らせているよ

重ねた手の空から
伝わる思い 今そっと
見て見ぬふり
君のためと思って

遠くへ行くほど
君は大きくなって
世界を散らして歩く
求めれば 求めるほど
大きく 大きくなって

代替

最後に交わした言葉は
まだ生きていますか
薄汚れたシャツを
まだ着ていますか

世界は歩み続けて
二人を引き離してしまって
劣化した絆の紐が
ゆっくりと揺れています

あなたの八重歯の先に
光を見ていたけれど
どんな人にだって
光はあるんだもの

もう二度とそこには
戻れないでしょうか
輝いた心を
まだ誇れていますか

もう信じていない

宝石

貴方に貰った日々を
強く刻むために
心に生かすために
別れを糧にしようとして
強い振りを試してみたけれど
やっぱり無理でした

本当は粉々にして
全部捨ててしまいたい
もう一度誰とでも
作り直せると思いたい
でも わかっている
特別で輝いていた
二人でしか成し得なかった

夏の夢

夏の夢

遠い夏の夢は

現実を追い越して

君を捕まえた日を

何度も具現化する

羽をもがれた蝶が

徒歩で世界を巡り

苦い蜜の秘密を

知らせたその日に

「愛してる」は 言葉じゃない

その答えにたどり着いたのに

愛している その人は

とっくに過去へと帰っていたのだ

遠い夏の夢は

いつまでも苦しみを与える

苦い蜜に溺れた

蝶の音が響く

後悔の先

得られるものを探して
傷付いた心閉ざしたまま
迷い込んでも
騙されてはくれなかった

僕は 風ではない
僕は 森ではない
僕は 川ではない
僕は 君ではない

綺麗に流したつもりでも
巡った後に舞い戻る
疲れた真理は岩に砕け
次の世紀を待ち続ける

君は 愛ではない
君は 夢ではない
君は 影ではない
君は 僕ではない

膜

内側ばかりに解説されても
とうの昔に見逃してしまった
生まれながらの僕の心は
おどけながら走り去って行ったよ

傷ついた振りとか簡単に言う
振りをする事すら傷つくのに
膜が覆っているように見えて
隠そうとする膜が僕自身なんだ

わからないことに怯えさせないで
いつかは溶け込んでしまうだろう
綺麗になることを求めないで
美しいものは砕かれやすいから

外側ばかりに誘い出さないで
裸にはまばゆい烙印があるから
みんながむしりとりに来るよ
しばらくここで眠っていたいよ

本当の願い

こだわりと誇りといらだちと
絡まっているものは全部捨てたい
憧れとあきらめと悲しみと
難しいことは早く忘れたい
まだ名前を読んでもくれる人がいるうちに
洗い流してしまいたいよ

きっかけを作ってくれたのは
紛れもないあなただから
決してなくすことのできない
大切な絆だから
見苦しい僕を許してよ
すぐには変わることはできない
新しいことを探してる
大切な夜が過ぎていく

まるで変わることは無理だけど
少しだけ先に進んだら
きっと微笑んでくれるから
それが幸せなんだろう
ああやっぱり本当の願いは
いつまでもあなたに名前を呼ばれることだ

君が居なくなって初めて

君を言い訳にして前ばかりを向いていた
追いかけていることにして自分を慰めた

君がいなくなったときに初めてわかった
いつまでも同じ距離でいたかっただけだ

君に会うことができなくなった事実から
初めて本当に前を向く強さを知ったんだ

この世界から 理由が消えて
残されたのは 小さな後悔
いつだって 走り出せたのに
いつまでも 歩いていたかった

君との思い出はあまり語らないでおくよ
振り返らなくても今は僕だけの道だから

薔薇遊BI

BARABARA 馨 銀 憐 歌

KURAKURA 祈 劍 親 理

花 棘 赤 風

束 贈 今 叫

IN TO 輪廻

GO TO 正夢

正当 検討

土壤 訴訟

SURASURA 譬 清 想 棄

YURAYURA 薔薇 揺 薔薇 BARABARA

鏡

会いたいと思っている
会いたいと言葉にする
そうする度に
会えないことを痛感する

置き去りにされた鏡
君ばかり映していたせいか
僕のことはあんまりうまく
表現してくれないんだ

ガラス窓にも
コップの中にも
幸せに染められていた
僕はもう見えない

置き去りにされた鏡
君の名残を探す
置き去りにされた鏡
僕の名残を探す

最後の雪

淡い期待は粉と散った
離れた車両は異なる行き先で
擦れ違うしか出会いようがない
白い息が漂う中
この冬最後の雪が舞い始める
二人にとって永遠を合図するもの

すぐに吸い込まれて
姿を留めることもできない
本当に白かったのかい
そう 二人にもあった
地面に足を付けるまでだけの
短すぎる純粹と錯誤

荒い言葉で別れを告げた
いままでで一番大きく手を振る
擦れ違うことすらあるのだろうか
雨へと変わっていく
春が全てを塗り替え始めたら
二人にとって全てが思い出になる

don't know

知らない街の知らない通り
知らない言葉を探し続けて
結局君の横顔見つめる
ボクをどこに連れて行く気だろう

知らない同士知らない関係
知らない未来を夢見続けて
結局幼いままで過ごしている
ボクはどこに連れて行けるだろう

笑った顔は本物かい
ボクは少し苦しいよ
昔拾った貝殻が
後部座席に落ちている

知らない夜
知らない光
知らない声で
求め合って
結局二人
立ち止まったまま
新しいビンに
ふたをしてしまう

笑った顔を覚えて
ボクはまだ苦しいよ
今誓った言葉が
どこでもいいから届きますよう

君の花

慣れるまで待っていたら
少しも進めないままだ
忘れ様のない深い傷と
君のくれた種から出た芽

憧れと現実の接点は
やっぱり少し無理気味だ
忘れ物を残せない日々
君が隠れるよう言う度の罪

僕の靴はもう焼き捨てたから
何も二人をつなぐものはない
最後は心だ 言う事を聞かない
最後の心だ 君が刻まれている

快い日差しはまだ
二人の朝を思い出させる
忘れ方を教えてください
君のくれた花が枯れるように

刹那

比べるべくもなく
愛は泣きじゃくる君を
放っておかない
けれど

逃げ出したいことを
押さえつける欲望
抱きしめてから
なげく

惑って迷って
何も決めないことに
いつもたどり着く
だから

今だけは心の
表層を真理にする
永遠を切り取った
この刹那の想い

マスク

べてください 私の心を
暗くて黒くて うねっているから
それをひのまま
受け止めて欲しい

綺麗になると
綺麗と言われ
綺麗だけに
なってしまうから

そのハーモニカで
いつでも呼んで
孤独な星に
名前を付けよう
君の前では
マスクがいらない
流れる涙を
直視していて

調べてください 私の秘密を
謎めいて蠢いて 自分も知らない
そんなところを
探って欲しい

優しくなると
優しさだけで
優しいことを
纏ってしまえる

このアーミーナイフで
料理を作ろう
琥珀の夢に
セリフを付けよう
君の言葉は
マスクを剥がすよ
流れる涙が

全てを癒す

運命

世界中のたった一人が
今この町にいるなんてこと
お互いに信じてないよね
だけど、今手をつないでいること
絶対に後悔なんてしない

言葉をつないでいくと
いろんな人と通じ合うんだ
君じゃなきゃいけない理由
そんなの探す必要ない
君にできることを精一杯探す

世界中でいろいろな二人が
手をつないでいるんだろうね
お互いを大切に想えれば
赤い糸は見つけなくていいよ
運命を紡いでいこう

情熱経路

私と夢とどっちをとるの　なんて
言う女には　渡したくない
私は夢を　忘れさせるから
それで解決　うまくいく

本当は　あなたは
夢なんかなくて
今日を生きることが
精一杯なんでしょう

現実に溺れなさい
私を見ていなさい
恋しなさい　そして
幸せにしなさい

私と夢の関係なんて
考えなくていい
時計が回り続けるままに
生きていけばいい

塔

捕らわれて心の中で
幾層にも重なっている
不埒な欲望
実現しないための砦

この塔は
守り抜かなきゃ
貴方は知らない方が
いいでしょう

妄想の自由なはばたきでは
もう何度空を飛んだでしょう
きっと それは 多分 全部
叶わないからこそなの

捕らわれて心の中で
幾層にも重なっている
不幸な熱望
ずっと育てている

Bad Time Music

知らない ねえ もう少し
遠ざけていいのに
居るの？
要るの？

実際実態なんて上腿醜態
もう いいの なんて言う
全部リズムでごまかすの
BAD BAD BAD Time MUSIC

変わらないって言うけど
環境は変わってく
相対的だなんて
言葉にしたってさ

知らない ねえ もう私
気分害してる
全部リズムが塗り替える
BAD BAD BAD Time MUSIC

Cool on the planet

十分すぎる罨
くぐり抜けていく
スリルも何もない
楽しくないでしょ？

貴方の惑星は
平穩を育ててる
どこまで歩いても
同じ景色じゃない

世界を転がすぐらいの
とんでもないこと目指してよ
私が心を動かされるのは
そういうこと

十分もたない罨
気付かないんだもの
スルリと帰ってく
嫌いになれたらね

トマト・ベイビー

汚れた皿の上で
食べぬ食べぬ重い想い思い
あなたがいつも残したサラダ
私がいつも入れたトマト
知っていた
あなたがそこに何を見ていたのか

冷蔵庫にはいっぱい詰まってる
憧れも希望も現実も
全て染め上げていく過去
傷つけないことが最大の傷
汚れた皿を捨てる

ベイビー トマト
抱っこして さよなら
できない できない
ベイビー ベイビー

熟れたものは売れる
サラダに包まれていたい 痛い
完全な夜を冷やしてよ
ずっと抱え続けている
綺麗にしてしまった 嫌だ
ベイビー 泣いてよベイビー

この思いがつかめるのは
今この食卓だけ
赤いものは大嫌いだから
もっともっとトマトが欲しいわ

あとがき

恋愛についてはあまり書かない.....と思っていたら、恋愛の詩、結構ありました。
なんだか曲がったり後ろ向きだったり。
苦くて不鮮明、そんな詩集。

